



石原莞爾の航西 その二：一軍人のヨーロッパ体験

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006240

石原莞爾の航西（その二）

— 一軍人のヨーロッパ体験 —

伊 藤 嘉 啓

一 小説—矢來の交番

この稿、しばらく休んでゐる間にも、石原莞爾に関する研究は、いくつ出版された。その中で、もつとも注目されるのは、マーク・ピーティの『日米対決』と石原莞爾（たまいらほ刊）であらう。著者のマーク・ピーティ (Marke Peattie, 1930-) は、マサチューセッツ大学の日本史の教授であり、この研究は、ピーティの博士学位論文で、二十年まへの一九七四年に執筆されたものであるが、それがこのたび日本語に翻訳出版されたのである。原題は *ISHIWARA KANJI and Japan's Confrontation with the West* となつてゐる。石原は、「あたかも流星のように、突然現れ」、「輝きながら日本政治の天空を飛び去り」、「瞬く間に姿を消した」が、ピーティにとつて、「近代日本史上のテーマのなかでも、石原莞爾に匹敵するほど……心引かれたテーマはなかつた」（訳書、七頁）とのことである。

ピーティの研究以下、数多くの石原論は、いづれ追々参照して行くとして、私たちは、まづ、石原大尉と共に、インド洋上の旅をつゞけよう。大正十二年二月二十四日、船はコロンボの港を出帆、一路、紅海に向ふ。

航海中、乗客はさまざまのことをして時間を消化しなくてはならな

い。その中でも、目につくのは、西洋人のダンス。石原は、このダンスを、口を極めて罵倒し、自分は、大抵、本を読んで過した。例へば、山川智広『日蓮聖人伝十講』、田中智学『日本国体の研究』、そして、日蓮その人の著作『開目抄』などである。ところが、二月二十四日の手紙によれば船内に図書室があり、「数日前より少々小説等借り出すテ読ム」とある。

石原は、「全然芸術的気分ニ欠ケタ人間」であると再三云つてをり、文学だけでなく、芸術一般について理解能力をもたないかの如く振舞つてゐるが、それは、石原が人と話してゐて、「私は兵隊で無学でございますから」と云つたりすることがあつたが、それと同類の、石原のもつ極端な性格の一面である「へりくだり」の一種であると思はれる。石原は芸術——中でも、文学に対しては、なか／＼の感受性の持主であつた。私たちが、いま、読みすゝめてゐる旅先から妻への手紙が、それを証してゐるであらう。

夏目君ノ小説ノ中ニ、矢來ノ交番ノ辺リ等出テ來タ時ハ、新婚當時ノ事等思ヒ浮ベタリ。(二月二十四日)

漱石の小説で、「矢來ノ交番」が出て来るのは、『彼岸過迄』であ

る。敬太郎が、例の「中折を被つた男」を尾行し、雨の中で見失ふのが、「矢来ノ交番」の所である。小説を読んで来て、その中の場所から、自分たちの新婚当時に思出したといふのは、漱石の小説について語つてあるやうでありながら、それは単なる導入にすぎず、実は、自分たちの幸福な結婚生活を回想する形で、妻への労りをあらはしてゐる。

石原の性格を、「粗野にして無頓着」と要約した人があるさうだが（選集9、二七九頁）、手紙を読んでみれば、「粗野」とか、「無頓着」とは、およそ対蹠的な像が浮び上つて来る。

二 エジプト

二月二十五日、午前四時過ぎ、船はスエズに到着した。こゝで、誰でもカイロ観光となるのだが、特に石原にとつて、カイロは「幼少時代ヨリアコガレノ地」であつたから、その期待は、いやが上にも高まる。しかし、時間は、あまりない。ポートサイドで、船と合流するまでの一日が、カイロ行の日程である。一刻も早くと思ふが、港の係員は賄賂を目当てにしてゐて、なか／＼仕事がすまさない。それでも、午前七時に汽車に乗り、カイロに着いたのが、午後一時、早速自動車をやとつて、ピラミッド、スフィンクスを見てまはる。

ピラミッドハカイロノ対岸ヨリ始マリ其南約七十里、実ニ七十計リモアルト！ 然シ我等ノ見物セルカイロ対岸ノモノハ尤モ大キナモノナリトカ。直チニ車ヲ返シテ博物館ヲ見ル。

数百ノ「ミイラ」、無数ノ石像等真ニ天下ノ珍品ナリ。時間來レ

ル為、看守ニ追出サレ、回教ノ寺ヲ見ル。美事ナル大理石ヲ以テ造レル宏大ナルモノナリ。殊ニ此寺ハ市ノ南小山ノ上ニアリテ、広クナイル平野ヲ展望シ、カイロハマルデ目ノ下ニアリ。Napoleonノ本營ハ此処ニ置カレシトカ、其居室ナリシト称スルモノ及大理石ノ浴槽現存ス。小生ハ一寸其内ニ入ツテミル。

（二月二十五日）

モスクを訪れても、石原は、その頃の日本人の大部分がさうであつたやうに、イスラームには興味を示さず、関心は専らナポレオンである。しかし、エジプトは、石原にとつて、たゞナポレオンのみではなかつた。

数千年前欧州文明搖籃ノ地トシテ、高級ノ文化ヲ生ミシ此埃及、又近クハNapoleonノ遠征ヲ中心トシ、英国ガ世界ノ覇權ヲ確保スル為ニ英仏競争ノ中心タリシ此埃及、余ガ幼少時代ヨリアコガレノ地ナリシガ、今親シク此ノ地ヲ踏ミ感慨誠ニ深シ。

（同右）

午後一時過ぎから始まつたカイロ見物は、約五時間であつた。午後六時には、カイロ駅から汽車に乗り、ポートサイド到着は十時半で、ベットに入つたのが、かれこれ真夜中の十二時だつたといふ。スエズに入港したのが、午前四時であつたから、この日は、二十時間行動した計算になる。

石原は、何かといふと「ナポレオン、ナポレオン」であるが、これは、英雄崇拜に類するやうな個人的好みからではなく、別にそれなり

の理由がある。

石原は陸大の卒業である。陸大は参謀養成を目的とした学校であるから、その卒業生である石原には、当然、「戦略」がもつとも重要な意味をもつ。まづ、身近かな日露戦争を手がかりに考へてみると、「いかに考究しても、その勝利が僥倖の上に立つてゐたやうに感ぜられたのであつた。「もしロシアが、もう少し頑張つて抗戦を持続したなら、日本の勝利は危なかつたのではなからうか。」「戦争史大観の序」

かうして、石原は、佐藤鉄太郎の『帝國国防史論』を読む。これは、当時、日本人の書いたものとしては、最もすぐれた軍事学の本とされてゐたからである。しかし、石原は、その論旨に納得出来なかつた。著者は、「日本の国防と英国の国防を余りに同一視し、両国の間に重大な差異のあることを見通してゐる」と批判してゐる。これに対して、「ナポレオンの対英戦争」こそが、「われらの最も価値ある研究対象である」といふのが、石原の主張であつた。ナポレオンは、石原にとつて、崇拜する英雄であるよりも、もつと軍事学的な関心事なのである。

石原は後に、戦史を広く歴史の発展の中でとらへ、戦争の性質としては、消耗戦略と殲滅戦略とが交替してあらはれると図式化し、消耗戦略の代表としてフリードリヒ大王を、殲滅戦略のそれとしては、ナポレオンをあげてゐる。

消耗戦略 (Ernährungsstrategie)、殲滅戦略 (Niederwerfungsstrategie) は、ベルリン大学教授デルブリュック (Hans Delbrück, 1848—1929) の用語であるが、それが、消耗戦争、殲滅戦争と云ひかへられ、さらに、満洲事変以後は、持久戦争、決戦戦争となり、有名な最終戦

論へとつながつて行くのは、まだ先の話である。

三 ポートサイドからマルセーユまで

船はポートサイドを出て、地中海を航してゐるが、二月二十八日の手紙は、またしても、石原の繊細な神経を示してゐる。

此ボーイ(片山トイフ人)ニ托シ、宝石一ヶ送ル。……勿論大人物或ハにせ物ヤモ計リ難シ。色合等モ年ニツリ合ハザルベシ。然シ此亭主ガ嬪ニ宝石ヲ送ルトハ破天荒ト申スベシ。見掛ケニヨラザル嬪孝行。錦チャンタルモノ、到着セバ老人及清次郎ニモ天どんノ一杯位ヅツオゴル必要アルベシ。

おそらく、石原は無自覚のうちに人を傷つけたりはなかつたのではないか。多くの伝記の伝へるところによれば、石原は毒舌家で、しばしば相手を罵倒したといふが、それは、つまり、いつも故意にさうしてゐたのである。石原といふ人は、女の気持ちもよく分り、雄々しさの裏にひそむ女々しさの価値をも理解してゐたのではないかとさへ思はれる。寶石がとどいたら、自分だけ喜んでゐないで、家内の者に、天井の一つもおごつてやれ、と止めの助言も忘れない。

コルシカ島とサルデニア島の間を通過した時には、もちろん、ナポレオンのことが頭に浮かぶ。

コルシカハ御承知ノ通りナポレオン誕生地。中ニ高イ山(四五千尺モアランカ)アリテ、白雪ヲ戴クヲ見ル。朝来少々雨ノ気味ア

リテ黒雲ノ間ヨリ之ヲ遠望スレバ、古英雄ヲ偲ブニ尤モフサハシキ感アリ。(三月二日)

かくて、フランスのマルセーユに着いたのが、三月三日午前九時である。一月二十日の神戸港から数へて、約四十日の船旅であつた。

マルセーユ港外ニハカノ黒岩ノ岩窟王ニテ有名ナル牢獄アリ。

(三月三日)

「黒岩ノ岩窟王」とは、黒岩涙香訳『岩窟王』である。涙香が、フランスの作家アレクサンドル・デュマ(父)の『モンテ・クリスト伯』を『岩窟王』と題して、「万朝報」に翻訳連載したのは、明治三四年三月から三五年六月である。のち、扶桑社から出版された。涙香訳のものとしては、『鉄仮面』、『噫無情』と、この『岩窟王』がもつとも人氣が高く、石原もこれを読んだことが分る。この小説の主人公ダントス(Dantes)は、無実の罪で、マルセーユ沖の「島の牢獄」に幽閉されるが、石原はそれに触れてゐる。書名だけ聞いて、読んでゐないのなら、こゝまで内容には踏み込めない。

石原のヨーロッパ滞在よりやゝ後になるが、大正十五年、改造社が「現代日本文学全集」を発売、それが一冊一円だつたところから、「円本」といふ言葉が生れた。その後、他社も、この形式をまねて、「世界文学全集」(新潮社)、「明治大正文学全集」(春陽堂)などが出たが、石原の第六郎の回想によれば、石原はこれら円本の数冊を購入したさうであるし、昭和二年に発売された岩波文庫では、トルストイの『戦争と平和』も買つて読んだとのことである(選集9、二九六頁)。

当時の小説の読者といへば、少数の文学青年と、それに女性、子供などが主であり、小説は、大の大人があまり手にとるものではなかつた。志賀直哉の父親は実業家であつたが、息子の書く小説などは無価値と見、せいゝ馬琴の『八犬伝』を読む程度だつたといふが(『創作余談』)、志賀直哉の父が、特に小説嫌ひだつたわけではなく、それが普通だつたのである。大人の読書とは、漢詩漢文であつた。

さういふ状況を考へてみれば、石原は、軍人としては、なかゝの小説愛好家と云へぬでもない。もつとも、トルストイの『戦争と平和』は、小説としてばかりでなく、この小説の第三部、第四部には、ナポレオンのロシア侵入がゑがかれてゐるから、ナポレオン研究のためにも、読んでみようとしたのかも知れない。

四 オペラ

マルセーユには十時間ゐて、午後七時十五分の汽車でパリに向ふ。翌三月四日午前九時、パリに到着したが、あらかじめ電報を打つておいたのに、駅に出迎への者はなく、なんとか一人でホテルに辿りつく。

巴里ノ町ハマルセーユト異リ比較的感じヨシ、然シ一寸面白イト思ヒシモノハナポレオンノ凱旋門(宿屋ヨリ数町)及オペラ位ノモノ、其他ハ無風流ノ小生ニハ一向感心出来ズ。却テ巴里郊外ノ農村等ヲ車中ヨリ望ミシ時ハ氣持ヨク思ヘリ。世田谷好キノ田舎者ノセキナルベシ。(三月四日)

「一寸面白イ」として、凱旋門と共にあげられてゐる「オペラ」は、

オペラ座。石原は、パリの街を見ても、この二つ以外は、「一向感心出来ず」と書いてゐる。これは、少なくとも、戦前の日本人が、ヨーロッパの大都市に一步足をふみ入れた時の第一印象としては、異色の方に属する。大抵は、鷗外の『舞姫』の冒頭にあるやうに、広い道、

その両側に整然と並ぶ高層の建物などに、圧倒されたやうである。石原から八年後の一九三一年でも、「ベルリンについた瞬間から、街並みに一種の威圧を感じた。これはかなわないと思つた」といふ証言もある（植田敏郎『森鷗外の「独逸日記」』、大日本図書、三一頁）。

「世田谷好キノ田舎者ノセキナルベシ」、石原ノ留守宅は、東京市外世田谷町世田谷十四番地で、その頃の世田谷は、大へんな田舎であつた。

石原は十日ほどパリに滞在し、結構、方々を見物してゐる。ルーヴル美術館やヴェルサイユ宮殿は、云ふまでもない。しかし、これらについては、多く語られてゐない。ヴェルサイユでは、こゝでのルイ十四世の栄華とか、ナポレオンとか、ドイツ帝国の戴冠式とか、第一次大戦の媾和会議などに思ひをめぐらすか、「無風流ノ小生ニハ一向ニ感心出来ヌ建物ナリ」との感想を述べてゐる。

それよりも、私たちに面白いと思へるのは、石原が、「巴里名物ノ寄席」に行つたり（三月六日の手紙）、オペラを見てゐることである。

夜オペラヲ見ル。音楽ヲ解セザル小生ニハ支那芝居ニ毛ノハエタルモノ位ニシカ思ハレザリシモ、兎ニ角此処ニ出入リスルモノハ所謂巴里ノ上流ノモノヲ主トスルガ如ク、観客モ比較的上品（勿論衣装ヤ化粧ニ全力ヲ尽シ人ニ見セテ得意然タルハ帝劇辺以上ナリ）、音楽等モ何トナシ落着キアリテ、巴里入城以来尤モヨキ印

象ヲ受ケタリ。此中ニ顯ハレ来ルダンスハ先日見物セルモノ等ニ比シテハ勿論上等ラシク品位アルモ、矢張り肉感ヲソルル如キヤリ方少ナカラズ。（三月十一日）

パリでもつとも印象深かつたものが、ルーヴルでも、ヴェルサイユでもなく、オペラだつたとは！

「此中ニ顯レ来タルダンス」、石原の見たオペラが何だつたかは分からないが、フランスでは何であれ、オペラの中にバレエが入つてなくてはならない。それで、ワーグナーも『タンホイザー』のパリ公演では、フランスのこの伝統に従つて、ヴェヌス山の場を拡大し、バレエを入れたのであつた。石原は、オペラの中のバレエも、社交ダンスと同様、「肉感ヲソル」と云つてゐるが、その通り、フランス・オペラに、なぜバレエが不可欠かといへば、観客の貴族たちは、自分の情婦が舞台の上で肉感的に踊るのを見物し、それを何よりの楽しみとしたからである。このやうな上流の観客は、劇場に行つても、その場面さへ見れば、よかつたのであり、その他の所はあまり見なかつた。

こゝで、石原は、「オペラ」と書いてゐるが、なか／＼現代風と云へる。この頃は、普通、「歌劇」と呼ばれてをり、これより少し前になるが、永井荷風の『西遊日誌抄』なども、ことごとく、「歌劇」である。もつとも、石原がかう書いた三十年も前の明治二十年代に、早くも、鷗外訳『即興詩人』には、「オペラ」といふ言葉が使はれてゐる。

五 和服

石原は、第一次大戦の古戦場めぐりも忘れない。パリの北東、ラン
ス (Reims) 、アミアン (Amiens) 、サン・クワンタン (St. Quentin)
など。

殊ニサンクワンタンハ停車場ノ修理スラ未ダ完成セズ、市内到ル所
惨害ノ跡ヲ止ム。日本内地ノ人々ガ考フル如ク、独仏ノ融和等ハ
出来得ベキモノニアザルヲ痛感ス。此惨害ノ間ニ生レ育チタル
人々ノ脳裡ヨリ、対独敵愾心ヲ去ルハ尋常一様ノ手段ヤ、十年ニ
十年ノ歲月ノヨクナス所ニアラズ。結局人類ハ一同声ヲ揃ヘテ南
無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ル日々来ラズンバ、野獸ノ如キ欧州人ヲ救
フ能ハザルナリ。(三月九日)

第一次大戦の戦後処理として、ヴェルサイユ講和会議が開かれたの
は、一九一九年、それから四年経過してゐるが、戦禍はまだ修復され
てゐない。戦勝国のフランスでさへ、ドイツに敵意をもつてゐるとな
れば、過酷な賠償と悪性インフレに苦しむドイツの対フランスへの反
感は、ことさら指摘するまでもない。敵意は敵意を生み、復讐は復讐
の種子である。「一同声ヲ揃ヘテ南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ル日々」が
来なければ、人類は救はれないであらう、と云つてゐるが、のちに石
原は、さうした絶対平和の状態を、世界最終戦後に思ひゑがくやうに
なる。

パリ滞在中の石原について、もう一つ記しておきたいことがある。

三月十日は、日本の陸軍記念日である。明治十八年のこの日、日本軍

は奉天を占領した。それで、在パリの陸海軍将校の間で宴会があつた。
数十名が集まつたといふから、ずゑ分大勢の日本将校がパリにゐたも
のと驚く。この会食に、石原は和服で出席したのである。

小生ノ日本服ハ相当問題トナリ居ルモノト見エ、突飛ナコトハ止
メタ方ガヨカラウ等ト親切ニ忠告スル人スラアリ。(三月十一日)

日本服が、どうかうといふよりも、石原は、時にかうした「突飛」
な行動をした——あるいは、さういふ行動が好きだつたのである。
石原の性格の一面である。

しかし、中には、和服姿の出席を面白がる者もゐた。

朝香宮殿下ニハ和服トハ面白シトテ特ニ種々御下問アリ、恐懼ノ
至リナリキ。又偶々招待ヲ受ケテ来リ居タル一仏国将校ハ「余ハ
数年来日本ノコトヲ研究セシガ目ノアタリ日本服ヲ見タルハ今日
初メニテ誠ニ美シク珍シク拜見セリ。若シ巴里ニアル日本人ガ凡
テ此ノ如キモノヲ着用スルナラバ嘸美事ナルコトナラン」等ト御
世辞ヲ述べ立テタリ。(同右)

石原は、パリといふ都市で、ヨーロッパ文明にはじめて直接触れた
わけであるが、こゝで、とにかく、ヨーロッパを体験しようといふ意
志がみられる。オペラを聴き、寄席に行き、さうして、社交界のダン
スを見てゐる。

巴里第一流旅館ノ御茶時間ヲ狙ツテ入ツテ見ル。蓋シ巴里社交界

ノダンスヲ見シガ為ナリ。美貌ヲ自惚レルめす共所謂キラヲ飾リ、男ヲ撰ンデ踊リ狂フ様驚ク外ナク、楽隊ノヤカマシキニハ殊ニ閉口セリ。丸デ御会式ノブリキカンノ如シ。此連中ハ米國辺ノ成金共ガ多キトカイフモ、兎ニ角毛唐共有産階級ノ享樂的気分ハ、殆ド頂点ニ達シアルガ如シ。日本ノ成金ノ如キハ少シハ民衆ニ遠慮スルモ、毛唐ノ横着ハ到底日本人ノ考ヘ及ブ所ニアラズ。……憐レナル白色人種ハカクノ如クシテ、日一日ト滅亡ノ淵ニ臨ミツツアルニアラズヤ。……兎ニ角毛唐ノ文明ノ前途ニハ、甚ダ悲觀スベキモノアルコトハ明ナリ。(三月十一日)

ヨーロッパ文明の衰微といふことは、この当時、一般に叫ばれてゐたのであり、これを国粹主義からの偏見と受取るならば、それは間違ひである。シュペンングラー (Oswald Spengler, 1880—1936) の『西洋の没落』 (Der Untergang des Abendlandes, 1918—22) が、話題となつたのも、文字通りこの時期であり、シュペンングラーの著書が完結したのは、石原のヨーロッパ到着の前年である。現実の世界を見廻はしてみても、第一次大戦後、ヨーロッパの矮小化は、ますます明らかとなつた。しかし、「日一日ト滅亡ノ淵ニ臨ミツツアル」と思はれた文明は、思ひの外にしぶとく、八十年後の今日もなほ、世界に君臨してゐる。それは、アメリカといふ嘗てヨーロッパの植民地であり、従来ノ国家とは異質の、民族も言語も固有のものをもたない「マムルーク朝」が、新しい活力を吹き込んだからであらう。

このほかに、石原はナポレオン廟などを見て、パリ見物を終へ、いよくベルリンに向ふが、パリを去るに當つて、「ヤカマシキ巴里ハ既ニアキ果テタリ。一日モ早く静カナ田舎ニ移リタキ心地ス」(三月

十二日)といふのが、その心境であつた。

六 ベルリン到着

石原は、パリを離れるに當り、お世話になつた人々を、日本食に招待し、労をねぎらつた。三月十四日に出発の予定であつたが、切符の都合で一日おくれ、翌十五日夜(十一時)に寝台車でパリを後にした。ベルギーは夢のうちに通り過ぎ、オランダのアムステルダムに、十六日正午過ぎに到着。こゝで列車を乗りかへて、午後六時過ぎのベルリン行一等車に乗込む。

夜の十一時ごろ、ドイツ最初の駅に着き、荷物の関税検査を受けなくてはならない。乗客は多く、役人の仕事はおそい。そのうちに、発車の時刻は刻々とせまる。「辛ジテ検査ヲ了リ荷物ヲ携ヘテ車ニカヘレバ車ハ何時ノ間ニヤラ切り取ラレテ影モナシ」(三月十七日)といふ仕末であつた。石原自身は、列車は切り離され、自分が乗つて来た車輛は、こゝからオランダに戻つたらしい、と云つてゐるが(里見岸雄當て書簡、大正十二年三月二十四日)、それは思ひ違ひだつたのではないか。

このドイツ最初の駅が、どこであるかは書いてないが、おそらく、オスナブリュックで、この列車はこゝで二つに分けられ、半分はベルリン行き、残り半分はハンブルク行きだつた可能性もあり、その方が確度が高いやうな気もする。何とか、石原はベルリン行きに乗込んだが、一等の切符をもつてゐると云つても、もはや空きの寝台はなく、それどころか、座席さへなかつたやうで、コンパート車の廊下で夜をあかして、三月十七日、午前八時過ぎ、漸くベルリンに辿りついた。

横浜出港から二ヶ月である。

大使館付武官香椎浩平、この人は、のちに二・二六事件の戒嚴司令官であり、石原は、その戒嚴参謀となるのであるが、この香椎大佐が歓迎の宴を開いてくれたので、石原は宴会よりも、妻からの手紙を楽しみに出掛けて行つた。しかし、そこに錦子夫人からの手紙はなく、とどいてゐたのは、「朝日新聞」と「天業民報」（国柱会の広報紙）と、それに田中智学の息子里見岸雄からの手紙だけであつた。石原は宴会も早々に切り上げて、宿に帰つた。さらに追討ちをかけるやうに、ベルリンについた翌々日の十九日からは、つひに風邪のために発熱してしまひ、一週間寝込まねばならず、ベルリン生活のスタートは、決して、幸先よいとは云へなかつたやうである。

ベルリンの街の第一印象が、どんなものであつたかは、よく分らない。さうした感想は、直接には手紙に書かれてゐない。たゞ、三月十五日付の手紙には、それらしいものが見えないではない。

小生ノ室ハ此旅館ニテ尤モヨキ部屋ナル由ナルモ、御本尊奉安ノ為メ頗ル都合悪シキニハ閉口ナリ。

連日ノ疲労ヲ医スル為、本日ハ終日休息ニ決ス。但シ朝食ハ宿ニテ出来ルモ、昼、夕食ハ必ず外ノ料理屋ニ行カザルベカラズ。コレニハ困リ入ル次第也。昼ハ抜キニシテ夕食ノ為町ニ出ツ。電燈ハ殆ドナク、丸デ暗黒ノ町、大通リニ糞ヲ見ル街、行ク人ノ服装ハ概シテ粗悪也。在留日本人ハ殆ド全部独乙ニ対シ、好意ヲ失ヒツツアル由。物価ハ最近頗ル高ク物ニヨリテハ日本ヨリ安カラザル由、写真機買入モ先ヅ先ヅ見合セタリ。尤モ安時計一ツ求ム。値十一万マーク（十二三円ニ当ル）鉄蓋也。（三月十五日）

ベルリンのホテルについては別のところで、「此宿中デ小生ノ部屋ハ尤モヨキ方」（三月二十四日）とあり、さらに、「毎々申述ベタ如ク、此宿屋ニテハ中・夕食出来ザルニ閉口、必ず付近ノ料理屋迄出掛ケザルベカラズ」（三月二十八日）と書かれてゐるのから見て、右に引用した手紙で云はれてゐる旅館は、ベルリンの宿を指してゐると思はれる。しかし、三月十五日は、夜の十一時まで、パリにゐたのだから、辻褄が合はない。次の手紙は、三月十七日付で、「今朝遂ニ伯林ニ到着ス」であるから、一つ繰下げて、この所謂「三月十五日」の手紙は、ベルリン到着後のもので、日付の間違ひであらう。

これは何も石原だけではなく、一般に、一通の手紙を二日ばかりで書いたり、一日のうちに同一人当てに二通の手紙を書いたりしないではないから、日付の錯綜などは容易におこり得る。現に、石原は、四月二日の手紙に、「今日ハ月曜日也」と書き出し、途中にまた、「今日ハ日曜日ノ為メ」とあるが、大正十二年四月二日は日曜日ではなく、月曜日であるから、こゝにも曜日の混乱が見られる。かうした様々な角度から見て、この「三月十五日」の手紙が、ベルリン到着後とすれば、「電燈ハ殆ドナク暗黒ノ町云々」は、ベルリンといふことになる。

七 ホテル

石原がベルリンについたのは、大正十二年（一九二三年）三月十七日であつた。この年の一月、フランスは、ドイツの賠償金支払が、はかばかしくないとの口実のもとに、ルール地方を占領した。ドイツはこのフランスの態度に反撥し、いはゆる「消極的抵抗」（*der passive Widerstand*）を行つた。労働者のゼネラル・ストライキである。ルー

ルはドイツ工業の中心地であり、石炭採掘量、および、鉄鋼生産は、全ドイツの八〇パーセント強を、この地がまかなつてゐたが、それが完全に停止した。ドイツ経済は破綻し、こゝから史上有名なドイツのインフレが始まる。しかし、石原がベルリンに到着した時点（三月）では、インフレはまだ、おだやかである。インフレが加速するのは、八月に入つてからで、その経過も追々見て行きたい。

石原の手紙によれば、三月ごろの一万マルクは、日本の約一円強に相当する（三月二十四日）。『値段のへ明治・大正・昭和の風俗史』上（週刊朝日編）によれば、大正十年の日本酒（一升）の上等酒が二円五十銭、中等酒が一円七十銭、並等酒で一円二十銭とあるから、当時の一円がどの程度の価値であつたか、一応、計算出来ないではない。

石原が、ベルリンで泊つたホテルは、「三流」なさうであるが、部屋の様子が手紙に書かれてゐる。

八畳數位ニ寝台（余り美事ナラズ）一ヶ、「ソファ」一ヶ、机一、衣裳戸棚一、枕机一、（此上ニ電燈アリ、床上ニテ読書シ得、抽出ノ中ニハ小便壺アリ、コレハ欧州至ル所ノ風習ナリ）。次室ハ化粧室ニテ便所浴槽アリ。入浴勝手。病氣モ治リシ故、毎日数回入浴セン。（入浴シテモセザルモ部屋代同一ナレバ病中ノウメ合セモセザレバ損也）。湯治ニ来タ考ニテ。（三月二十四日）

これで部屋代は、一日、一万五〇〇〇マルク、それに外国人税五〇パーセントが加算される。

石原の夫人への手紙には、石原の人柄があらはれてゐて、私たちの興味をひくのであるが、次のエピソードもまた、いかにも石原らしい。

大使館付武官香椎大佐ハ夫人出迎ノ為数日前ヨリ仏国ニ赴ク。今日其空巢ヲ狙ヒ、日本食ニアリックコトトス。先新夫人ノ為メノ室内ヲ内シヨデ一見ニ及ビ、後ハ女中ヲオダテテすぎ焼ヲナス。鱈腹詰メ込ミ費用ヲ計算スレバ一人前七十銭也。伯林モ案外物価ハ安シ。（三月二十七日）

一読滑稽の感があるのは、その表現に由る。「その留守に」でもよい所を、「其空巢を狙ヒ」とし、上官の夫人の私室を、「内シヨデ一見ニ及」んでゐる。この云ひ方で、憎めない・いたづらッ子の様子となる。書き様では、陰湿な行動にもなりかねない。その後、女中に「命じて」ではなく、「オダテテ」、すぎ焼を作らせ、「それを食べ」た」でいゝのに、「鱈腹詰メ込」んだと云ふのである。

この時、香椎の階級は大佐、石原は大尉である。三階級も上の香椎に対して、石原は、まるで友人のやうに接してゐる。日本は、タテ社会であるなどと云はれて、ステレオ・タイプの、さうした発言もあるやうであるが、それはとにかく、軍隊は、思ひのほか、寛大が支配してゐた。とくに、陸大出身者は、将来が約束されたやうなものであつたから、上司にへつらふ必要がなかつた。よく云へば、自由な発言、行動が許された面もあつたのである。さうでなかつたら、石原は経歴の途中で軍法会議にかけられ、以後の人生は全く違つたものとなつてゐたであらう。

この香椎大佐夫人は、石原の手紙にもう一ど登場する。

香椎大佐夫人ハドウヤラ少々足リサウナキ女。此女ガ色々熱心ニ宗教ニ関スル質問ヲナス。返答ニコマルコト多カリキ。質問ガ少々

脱線気味ノ事ノミナル為ニ。(十月三十一日)

たしかに、愚問から名答は生れない。宗教について、いろいろ質問され、石原は答に窮し、それを問ひが的はづれのせゐにしてゐるが、はたして、さうだったのか、どうか。案外、素朴な質問が、宗教の本質をついてゐたかもしれず、これはそれにうまく答へられなかつた石原の照れかしくしたつた可能性もある。

石原は他人の奥さんの店おろしばかりしてゐるのではない。同じ手紙(十月三十一日)に、「坂西君ノ奥方ハ大ニ伶俐ノ人ナルモ」と書いてゐる。「坂西君」とは、武官補佐官の坂西一良大尉である。

八 妻の手紙

ベルリンに到着して十日たつのに、夫人からの手紙は、まだとどかない。

石原はこのヨーロッパまでの旅行中、ほとんど毎日と云へるほど、日記のやうに身辺の出来事を手紙に書いて、妻へ送つてゐる。石原がベルリンについて、もつとも楽しみにしてゐたのは、妻からの手紙であつた。しかし、まだ一通も来ない。四月十七日、たうとう腹にすゑかねたのか、石原にはめづらしく、感情の爆発がみられる。

一体に、外での石原は、おだやかな人物ではない。人前で、感情をおさへることも少ない。軍隊では、副官に、しばしば兵士を喰らはせた。しかし、家庭で、怒鳴つたりすることは、絶えてなかつたといふ(選集9、二九九頁)。その石原が、こゝ(四月十七日)では、我慢し切れなくなつてゐる。

吉凶共ニ全クカクスコトナク報告急ヲ要ス。然ラザレバ事好意ニ出ヅルニセヨ不忠実ノ極トイハザルベカラズ。

若シ不吉ノ事ヲカクス位ナラバ、全然二年半通信ヲ断念シ、カク定ムレバ、小生ニトリテハ何等ノ苦痛ニアラズ。

「自己中心ノ考ヲ去リテ、真ニ本化ノ信ニ入レ」

南無妙法蓮華經

錦子夫人からの手紙が、石原の手に漸くとどいたのは、四月二十日。しかし、これ以後も、夫人からの手紙は、あまり来ない。

これより少し先の話になるが、六月七日の手紙には、「多忙ナレバ葉書ニテモヨキヲ以テ通信ハ断ザルヲ希望ス」と云ひ、九月に関東大震災がおこつた時にも、石原のまはりの日本人には、本国の家族から続々と手紙で様子をしらせて来るのに、この時も、石原にだけは、何の便りもとどかない。石原の留守宅は東京市外世田谷であるから、心配だつたのである。

小生ガ未だ地震後一信モ得ザルコトニ就キ、一同非常ニ同情ヲ寄ス。今日モ殆ド全部ノ人、日本ヨリ通信ヲ得タル日也トイフ。

(十一月十日)

関東大震災は九月一日、石原がそれについての夫人からの手紙を受け取つたのは、震災後、実に三ヶ月後であつた。

十一月三十日、やつと夫人からの来信に接し、石原は早速その文を引用しながら、次のやうな返事を書く。

「地震後モ通信ガキク様ニナツタラ、マトメテ差出サウト思ツテ、時ニ書キ留メテ置イタモノモアリマシタガ其ナカノ要点ヲツマシテ」云々。折角書キトメテクレタノヲ、何故ニ其儘送ツテクレナイモノカ小生ニハ、一向合点行ザル也。鉛筆ノ走り書ノ間ニ、尤モヨク其時ノ心持チガアラハレル事ト思フ。……折角書イタノヲツマシテ、要点ノミトスル必要ガ何処ニアリマセウ。

(十一月三十日)

石原は、「走り書キノ間ニ、尤モヨク其ノ心持チ」が出ることを知つてゐた。だからこそ、ほとんど毎日、日記のやうな手紙を書いた。後で整理された文章は、調つてはゐても、そこには、こちらに訴へかけて来る力が不足してゐる。荷風の『断腸亭日乗』が、さうであり、鷗外の『独逸日記』にも、同じやうな傾向が見られる。石原書簡の魅力は、推敲を経てゐない、走り書きにこそある。十一月三十日の手紙は、まだつゞく。

「永イ間御無沙汰シテホシタウニ申訳ナイ。……私ノ不忠実サ」
……カクノ如ク書カレタコト漢口以来幾度ナリヤ。

大正九年五月、石原はそれまでの教育総監部から、漢口の中支那派遣隊司令部付を命じられた。漢口は、揚子江中流に臨む沿岸都市。直属の上司は、板垣征四郎であつた。のちに、滿洲事変の立案、実行の中心とされる板垣・石原の結びつきは、この漢口からはじまる。こゝでの石原の仕事は「特殊諜報任務」で、「変装していろいろな地域に潜入し情報を集める」のである（青江舜二郎『石原莞爾』、中公文庫、

八七頁）。この勤務中にも、石原らしいエピソードは、いくつか残されてゐる。例へば、怪しまれて身体検査される段になると、自分から素ッ裸になつて、検査員を驚かせ、靴の中の密書を救つたことなど（藤本治毅『石原莞爾』、時事通信、七七頁）。

石原は、漢口に大正九年五月から大正十年一月までつとめてゐる。その間、新婚間もない東京の妻に、せつせと手紙を書いたのである。

石原はドイツ留学中に、漢口からと同様に、多数の手紙を鏡子夫人へ送つたにも拘らず、あの新婚時代と比べると、最近は、「さつぱり」ではないかと、非難されたやうである。それに対して石原は、「何時ぞや漢口時代に比し、余りにさつぱりとの御話しありしも、御互に十分理解出来ざりし時代と異なり今は、『火の用心、おせん泣かすな、馬肥せ』の中に凡てを味ひ得るものと私は考へて居ます」（大正十三年九月十二日）と答へてゐるが、夫人は夫をなじるばかりで、自分は一向に手紙を書かない。おそらく、書けなかつたのであらう。

「御淋シイ御心ヲ思フテ一人熱イ〜ナミダニヒタリナガラ一日
〜ト延ビレバ延ビル程、マス〜罪ヲ深クスル事トハ万々承知
モシ、ソレ故ニ自分自ラモ一方ナラヌ苦シミヲ感ジナガラモ……
心ナラズモ永々ノ御無沙汰」云々。

再三申述ベタ如ク、決シテ悪口ヲイフ考デハナイガ、ヨク〜冷
静ニ此考ヲ分解シテ見タマヘ。慥カニ一種ノ精神病ト申サネバナ
リマセヌ。夜モネラレズニ心配シテ居ル位ナラ、何故ニ決然起ツ
テ「無事」ト二字丈デモ鉛筆ノ走り書キガ出来ナイノデスカ。

(十一月三十日)

石原は夫人のこのやうな状態を、単なる筆不精ではなく、「一種ノ精神病」としてゐる。「大英断ヲ以テ此点ヲ根本療治」しなければならぬ。さうすれば、「ヤラウ〜ト思ヒナガラ出来ナカツタ過去教年ノ問題」は解決するであらう、と石原は云ふ。しかし、この病氣は、何も鏡子夫人だけが患つてゐるのではない。石原自身が、陸大の学生時代から、この病氣に罹つてゐるのである。それで、石原は次のやうに、妻をなぐさめる。

決シテ鏡子君ヲ責ムルニアラズ。小生同病ナリ。同病相憐ムノ精神ヨリ特ニ御注意申上グ。(十一月三十日)

これは、石原の騎士道精神とでも云へばよいのか。当時の日本の家庭では、夫が妻に対して、上流家庭では少なかつたにもせよ、やゝもすると横柄な口のきゝやうをした場合も多かつたのと比べれば、雲泥の差としなければならぬ。

ところで、この病氣は、石原夫妻だけが病んでゐるのではない。「此の病氣ハ小生等ノミナラズ、正シク時代病也。世界ヲ挙テ今ヤ神經衰弱ニ苦シミツツアル也」と書いて石原はこの手紙をしめくゝつてゐる。

石原が、かういふ風を書くのには、それなりの背景があつた。漱石の『彼岸過迄』の中の「停留所」(十四)に、「一種の神経病に罹つてゐたのではなからうか」とあり、新版の漱石全集(平成六年、岩波)では、その箇所注して、「明治末から大正にかけて、〈神経病〉の用例は多い」とある。広津和郎の小説『神経病時代』(大正六年)は、そのやうな用例の一つの頂点を示してゐるとも説明してゐる。

石原は「精神病」または「神経衰弱」であり、こゝでは「神経病」と、用語は必ずしも一致しないが、指してゐる内容は、ほど同じである。石原が「時代病」と云ふ理由が、こゝにある。

九 ドイツ語

石原はあまりドイツ語が出来なかつたと云はれてゐる。石原自身が、「士官学校以来全く放擲してありし独乙語」及「Zell」以外全く不通にて閉口致し居り候」(里見岸雄宛、大正十二年三月二十四日)と云ひベルリン時代の石原と頻繁に行き来した里見も、石原は「外国語には余り得意でなく、特に「会話は実用を足す程度で、決して上手に流暢になど話すことは出来」なかつたと書いてゐる(里見岸雄「伯林時代の石原莞爾」——『石原莞爾研究』第一集、十二頁)。

しかし、ドイツからの石原の手紙を読むと、石原のドイツ語能力は、会話もふくめて、可成りのものだったと思はれる。石原は、まづホテルの女中をつかまへて、ドイツ語会話の練習をはじめた。

独乙語ハ今日尚殆ド不通、今日ハ友人ト共ニ一人ノ女中ヲ捕ヘテ種々語ツテ見ル。彼等ノ無学驚ク外ナシ。大ニ日本ヲ吹ク。コンナ手合ニ対シテハ横柄ニヤルセキカ少々通ズルモヲカシ。……毎日外国語ノ先生ニ就ク予定也。然シ帰朝迄遂ニ物ニナラザルベキコトハ確實ト見ユ。(三月二十九日)

次も、同様にホテルの女従業員との会話であるが、より一そう具体的である。この日は、復活祭の月曜日。

ホテルノ使用人モ殆ド全部休ミヲモラヒシモノノ如ク、広キ此ホテル（七十位ノ部屋アルベシ）ニ一人ノ女中居ルノミ。此女徹底の無神論者ニテ中々面白シ。例ニヨリ独乙語ノ稽古ヲナス。

「何故ニ外出セザルヤ、今日ハ祭日ナラズヤ」

「然リ然リ、当番ニ当リシヲ以テ留守セザルベカラズ」

「親方ノ命令ニテ当番スルナランモ、神ノ命令ハ、親方ノ命令以上ナラズヤ。今日ハ神休業ヲ命ズル日ナルベシ」

「親方ノ命令ニ服セザレバ、忽チ免職トナル、而モ神ハ我等ニ一片ノパンストラ与フル能ハズ」

「神ノ命令ニヨリ飢ユルハ人類ノ光榮トスル所ニアラズヤ」

「うそつきニ巧ナル神ノ為、飢ニ甘ズル程愚鈍ニアラズ」

彼女曰ク、うそつき共ハ、今尚神ヲロニスルモ、真面目ナル独乙人ニテ神ヲ信ズルモノナシト。……真ニ独乙民族ノ不信ニハ驚カザルベカラズ。（四月二日）

石原の手紙は、石原の生活や考へ、その時々^トの気持ちを生き〜と伝へてゐると同時に、当時のドイツの世相をも、よく描き出してゐる所もあつて、興味深い。例へば、こゝには、敗戦後のドイツ人の不信仰が語られてゐる。鷗外の『独逸日記』には、ドイツ人のある三等軍医は、「神を信ずること厚」く、いつも鷗外を「化外人 Heide」と呼んでゐたと書いてゐる（明治十九年二月二十七日）。この軍医と先の女中とを比べて、ドイツ人も変れば変わるものとの感をもつが、これが戦争に負けるといふことなのである。

石原の同じ日の手紙には、やはりホテルの女中が、「共産主義ヲ讚美スルコト頗ル熱心ニテ、時ニ顔色ヲカク。露西亞ニ憧憬シアルモノ

ノ如シ」とある。

ドイツでは、第一次大戦後の生活苦の中から、ナチスが生れたが、これはナチスでなく、共産主義でもよかつたであらう。ナチスカ、共産主義か。とにかく、ドイツ国民は、一片のパンを求めた。パンを与へてくれる「神」に憧憬した。そして、歴史としては、ナチスがその神となつた。共産主義でなく、ナチスだつたのは、単なる偶然であつたと云へば、歴史学の常識に反する。歴史家はやつきとなつて、あらゆる歴史の推移を必然的に説明しようとしてゐるが、生物の進化を決定する大きな要素の一つに、「偶然」があるとした学説があるやうに（中立説）、歴史においても、神様はサイコロを振つてゐるのだ。

石原のこの手紙は、ナチス前夜のドイツの民衆の意識をよく今に伝へてゐるが、さう云つた後で、石原は次のやうな感想を述べてゐる。

毛唐ノ資本家ノ横暴ハ中々日本ドコロノ騒ギニアラズ。……兎ニ角社会不安ハ中々大ナルモノト考ヘラル。根本的救済ノ方法立タズンバ西洋文化ノ前途モ中々容易ノモノニアラザルベシ。考ヘレバ考フル程、日本ニハ尊キモノアリ。西洋ニ来ル人々ハ先日本ニ就キ十分ノ研究ヲナシ来ルヲ要スルハ勿論、特ニ尤モ公平ナ頭ヲ以テ、冷静ニ内外ニ対照研究セザルベカラズ。ドウモ西洋カブレノ多キニハ恐レ入ル次第也。（四月二日）

西洋に行つて、西洋かぶれにならなかつた代表は、森鷗外と夏目漱石。

石原はこのやうに、ホテルの女中相手に、たゞ漫然とドイツ語の練習をいつまでもつづけたのではない。「早く少々語学ニ達者トナリ、

各方面ノ思想ニフレタキモノナリ」(四月二日)と考へ、もう少し組織的に、ドイツ語の勉強に励んでゐる。四月五日の手紙には、起床から就寝までの一日の細かい時間表を載せてゐるが、それで見ると、午前二時間、午後三時間半の勉強とは別に、午前十時より十一時半までの一時間半を、「独乙語ノ研究(語学ノ先生ニツキ)」に当てゝゐる。この予定表は、下宿先の都合から、実際には少し変更されるが(四月十五日の手紙)、石原が一日の時間をどのやうに使ひ、何に力をそゝいでゐたか、これで分かる。

石原は会話の練習にだけ熱心だつたのではない。ドイツ語の本もずゝぶん分量に買つてゐる。

本屋ニ至リ、一抱ヘモアル位ノ本ヲ求ム。……然シ本ノ安キニハ驚ク、コレニテ既ニ半年以上一年分ノ勉強材料ハ整ヒタリ。

(三月二十八日)

帰途例ニヨリ本屋ニ立寄り、一抱ヘノ本ヲ求ム。モウ既に百円以上モ買求メ一荷物トナレリ。一時間辛ジテ数頁ヲ読ム小生、一生カカルモ読ミ切レザル位ノ分量ナルベシ。(四月五日)

大正十二年の百円は、一体、どの位に評価すればいゝのか。銀行員の初任給が、大学卒業で、五十円〜七十円だつたといふから、『値段のへ明治・大正・昭和の風俗史』上)、これを参考に、凡その見当がつく。

石原はベルリン到着以来、ずっとホテル暮しであつたが、ベルリンよりは、もう少し閑静な田舎に住みたいと思ひ、郊外のポツダムを希

望した。大使館武官補佐官の坂西一良が、ドイツ語を習つてゐた大尉未亡人に、下宿探しを依頼したところ自分の母親の家ではどうかとのことであつた。早速、見に行くと、家主は、「六十余リノ上品ナル老婆」であつた。幸なことに、この老婆の話す言葉が、「頗ル明瞭」であり、ベルリンで買物にも困つた石原にも、相当理解出来るやうであつた。石原がベルリンでまごついたのは、多分、ベルリン方言に悩まされたためで、この家主のドイツ語は、石原が習つた標準語により近かつたからであらう。とにかく、石原はこゝに決めて、四月九日に入居した。住所は、Potsdam Birkenstr. 1 で、家主の名前は、Frau von Difturth である。